

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③⑥

名が行となるということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第88回から第90回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第88回では第十七願成就文について、第89回と第90回では第十八願成就文について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第86回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■本願が行となる

「諸仏称名の願」と呼ばれる第十七願に「十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、我が名を称せずんば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』18頁、東本願寺出版、以下『聖典』）とあって、名を通して願いを与えたい、十方衆生を平等に救いたいという願いをもった名なのだ。こういう意味で、諸仏に名を咨嗟して、讃めてほしいと。諸仏が讃めてくれなければ自分は覚りを開かないと。この願が成就して、「十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德の不可思議なることを讃歎したまう」（『聖典』44頁）と、こういう言葉になってきています。

親鸞にとっての真実行とは、諸仏が称名している、諸仏が讃めているということが行であるのです。行は念仏の行、「南無阿弥陀仏」が行であるわけですが、「南無阿弥陀仏」が行であるとは、十方恒沙の諸仏如来が讃めているというはたらきなのだ。名号の意味は、「諸仏称名の願」が行じてい

る。名が行となっている。その場合の行は、本願が行となっている。これはわかりがたいですね。

親鸞にとっての名は単なる名でなくて、選択本願が名をもって衆生に呼びかけようとしている、その名前自身が本願のはたらきなのだ。普通、名前は名詞、固有名詞であって、固有名詞は行ではないです。人間にとっての行とは、人間が努力して何かをする、人間が一つの行為をする、そういうことが行と言われる。ところが、諸仏如来が讃めていることが行だとは、名前が称えられるということは、十七願がそこに起こっているということだと。現実には、誰かが名を信じて発音するのもかも知れないけれども、そのことは、法蔵菩薩の本願が、阿弥陀の願いに賛同して讃めるということが、ここに起こっているという事実なのだ。一つの名前があるということが、十方恒沙の諸仏如来が讃めるという事実の現れなのだ。

これは「諸仏称名の願」ですから、凡夫称名ではないのです。だれが称えようと、どこで称えられようと、阿弥陀の名が称えられるということは、諸仏称名の願がそこに成就してきているという意味をもつということです。

■讃める人のところに阿弥陀が現れる

諸仏称名の「諸仏」とは何だろうということはよくわからないのですが、仏法を求め、仏法に出会い、仏法を語り伝えた方々の歴史が現代にまで残っている。そうした、自分が仏法を信じていける縁を残していただく方々は、私どもにとってはみな諸仏であると私は思うのです。阿弥陀

親鸞仏教センターの動き

(2016年2月～4月) 一抄出—

陀如来自身が諸仏によって讃められたいと。諸仏によって讃められてこそ阿弥陀が阿弥陀に成る。阿弥陀を讃めるところに諸仏のはたらきが起るわけです。仏法が起るわけです。十方恒沙の諸仏如来がみな讃めているということを手がかりにして親鸞聖人は『教行信証』の「行巻」をお作りになるわけですが、そこで經典の言葉を置いた後、龍樹から始まって、歴史上、念仏を讃めてきた文章をずっと並べられるのです。これはつまり諸仏如来の伝承です。

凡夫ですから、自分が諸仏だというふうには言えない。自分が諸仏だとは言えないけれども、仰ぐ側は念仏を伝えてくださる方を諸仏だと仰ぐことはできるわけです。信ずる人は凡夫なのだけれども、凡夫が信じてそのことを伝えてくると、それを聞いた人に念仏が伝われば、聞いた人間にとっては、伝えてくださっている方々は仏の仕事をしてくださっている、諸仏如来だというように仰ぐことはできる。信じたことを、このように信じたと伝えてくださって、それがまた人に伝わるという力をもったときには、伝えられた側は、伝えてくださった言葉や、そうした人たちを諸仏と仰ぐわけです。これが仏法の歴史、諸仏の歴史なのです。これは実体的に考えるのではないのです。象徴的に考える。そうすると、この十七願の意味が少しくわかってくるのではないかと思うのです。

そして、「南無阿弥陀仏」と称える人々のはたらきが阿弥陀を生み出すわけです。阿弥陀がどこにいるかといったら、讃める人のところに阿弥陀が現れるわけです。讃めるところに阿弥陀が成就するわけです。不思議な話ですね。人間が念じないのにどこかに阿弥陀がいるという話ではないのです。阿弥陀は衆生を救いたいという願ですから、私のための本願でありました、「南無阿弥陀仏」と言うところに、阿弥陀が現れるわけです。これが第十七願成就ということではないかと思えます。

(文責：親鸞仏教センター)

■ 2016年

- 2/3 第51回現代と親鸞の研究会「イスラームとその世界—私たちが知っておくべきこと」同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授：内藤正典氏（中央区・AP 東京八重洲通り）
- 2/4 第34回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
- 2/5 第11回研究員と読む公開輪読会「大悲の驚歎—善導『観経疏』を読む—」担当：中村研究員①2/5 ②2/12③2/19④2/26（文京区・東京大学仏教青年会会館）
- 2/12 ご命日のつどい
- 2/15 第89回（通算第140回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 2/16 第22回『西方指南抄』研究会
- 2/17 第184回英訳『教行信証』研究会
- 2/19 第162回清沢満之研究会
- 3/4 第23回『西方指南抄』研究会
- 3/7 『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会「対偽対仮」という営み—「顕浄土方便化身土文類」の課題—大谷大学文学部教授：加来雄之（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/10 第35回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会第90回（通算第141回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/11 ご命日のつどい
- 3/17 第2回清沢満之研究交流会（清沢満之から問われるもの—異領域間の「対話」は可能か？）「方法としての〈清沢満之〉の可能性—「悪」と近代への問い」明星学園教諭・早稲田大学現代政治経済研究所：繁田真爾氏、「清沢再誕—その歴史的意味」真宗大谷派教学研究員：名畑直日兄、「今村仁司の清沢満之論と「宗教哲学」の課題」愛媛大学准教授：杉本耕一、大阪教育大学教授：岩田文昭〈コメンテーター〉、親鸞仏教センター研究員：名和達宣〈司会〉（文京区・求道会館）
- 3/22 第7回センター会議（京都）
- 3/29 第163回清沢満之研究会
- 3/30 第185回英訳『教行信証』研究会
- 4/6 第24回『西方指南抄』研究会
- 4/8 ご命日のつどい
親鸞仏教センター新施設竣工式
- 4/15 第164回清沢満之研究会
- 4/18 第13回「親鸞仏教センターのつどい」記念講演「称名念仏と浄土—現代の思想的課題からの照射—」東京大学大学院人文社会系研究科教授：下田正弘、「深層意識の自覚化」親鸞仏教センター所長：本多弘之（千代田区・学士会館）
- 4/19 第186回英訳『教行信証』研究会
- 4/27 親鸞仏教センター移転開所式